

(例)

プロジェクト② 夏目漱石の俳句

【夏目漱石の俳句】



\* 漱石の肖像写真もお使い  
いただけます  
(松山市立子規記念博物館所蔵)

御立ちやるか御立ちやれ新酒菊の花

おたちやるか おたちやれしんしゅ きくのはな

明治二十八(一八九五)年十月、松山から東京へ帰る子規の送別会が開かれ、その席上で漱石が詠んだ俳句。

「送子規」という前書き(句の説明文)があります。「御立ちやるか御立ちやれ」は「出発しますか、それでは(気を付けて)出発なさい」という意味の松山弁。親友への惜別の情がにじむ一句です。季語は「新酒・菊」で秋。

鐘つけば銀杏散る也建長寺

かねつけば いちようちるなり けんちようじ

明治二十八(一八九五)年九月六日、「海南新聞(のちの愛媛新聞)」に掲載された俳句。漱石は松山の下宿

「愚陀佛庵」で子規と五十二日間共に暮らし、子規から熱心に俳句を学びました。また、漱石は東京帝国大学の学生時代、鎌倉の建長寺に参禅しています。季語は「銀杏」で秋。

筒袖や秋の棺にしたがはず

つつそでや あきのひつぎに したがはず

明治三十五(一九〇二)年十二月一日、留学先のロンドンで子規の死を知った漱石が作った子規追悼五句のうちの一つ。「筒袖」は洋服を着て異国に居る漱石自身を表したものと思われまます。漱石は高浜虚子に宛てた手紙の中で、ロンドンに渡る時、子規と生きて再び会うことはないと思っていたことを語っています。